東金郭外小西湖
―八鶴湖を訪ねて

欒　殿武

皆さん、こんにちは。今日はお忙しいところをわざわざお越しいただきまして、ありがとうございます。先ほどお話がありましたように、「文学史と房総」と題して今年で五年目になるこの公開講座、その第一回のときに本学の岩見先生が「漢詩に詠まれた八鶴湖」という題で既にお話をされました。当時お聞きになった方も中にはいらっしゃると思いますので、今年またこの近辺の話をするにあたり、八鶴湖の題をいただいた当初、非常に悩みました。ご当地ネタとなると、いろいろな意味で皆さんは僕より詳しいので、やりにくいのですけれど、今日は頑張ってやらせていただきます。

前回同様漢詩を詠むとなると、内容がだぶってしまいますので、今回は若干角度を変えて、漢詩を鑑賞しながら八鶴湖の風景はどういうふうに変わって現在に至ったのか、八鶴湖を詠んだ中央の漢詩人はたくさんいましたが、なぜ彼たちがこれほど多く東金にやって来て、八鶴湖を詩の題として選んだのかというところを、少し解読していきたいと思います。お手元の資料は三枚あります。レジメ二枚と資料一枚です。ご確認いただきたいと思います。

前回の内容は、毎年出させていただいております講演録の第一集に載っていますので、もし今日話をお聞きになって関心を持ってくださるのであれば、本学の図書館などに全部置いてありますので、是非ご覧ください。前回はかなり詳しく漢詩を詠んだようですので、今日は簡単に漢詩を鑑賞しながらやっていきたいと思います。前回取り上げなかった明治二十三年出版の齋藤夏之助『鶴湖唱和集』という参考文献を見ながら話を進めます。

今日はもう一つ皆さまにご紹介したい本があります。それは東金市の前身の東金町の歴史が書かれた『東金町誌』です。これは昭和二年に出された本ですが、地元の方で志賀吾郷さんが二回まとめたもので、当時の東金町の歴史や近辺の産業・商売などをかなり詳しく記述したものです。志賀吾郷さんは一八六一年生まれで、一九四六年に亡くなられました。八十六歳まで長生きされています。この本が東金町の歴史を理解する上で、現在では重要な参考資料になっております。あともう一つ、東金市役所が編集した『東金市史』があります。皆さんたぶんご覧になったことがあると思いますが、全七巻あります。非常に詳しくまとめられており、特にこの志賀さんについて年表の中で触れた個所が数カ所ありますので、やはり志賀さんが地元の歴史の編修に随分尽力された方であることがうかがえると思います。

それでは早速話に入ります。まず基本的な情報ですが、八鶴湖の名前の由来を見ていただきたいのです。「字谷にあり、谷は舊池袋郷と稱す」（『東金町誌』）ことから、もともとこの地名は「字谷」という地名だったらしいのです。小さな池だったのですけども、人工でできた池ということで、当初は「谷池」あるいは「谷の池」というふうに呼ばれたらしいのです。江戸後期天保十二年（一八四一）五月ですが、詩人遠山雲如

がこの地を訪ねて、池の形が鶴に似ていて、谷は八鶴に通じるところから「八鶴湖」と名付けたらしいのです。これが現在の通説になっていて、定説とまで言えるかどうかは分かりませんが、だいたい東金町、あるいは八鶴湖を紹介するときには、必ずこの遠山雲如が名付けの親だとされています。

また中国の西湖にちなんで小西湖とも称されると言われています。名前の由来については諸説があるのですけれど、この地で捕獲した鶴をよく幕府に献上していたところから、梁川星巌が「八鶴湖」と名付けたという説もあります。

もう一つ、江戸時代には池がもっと大きくて形が丸かったので、弁天島を鶴の頭に見立て、鶴が羽を広げた姿に例えたという説があります。これは大体どこでもそうですけれど、名前がひとつできると、あとからいろいろな由来話が作られるのですね。もし間違いなどがありましたら、後ほど是非指摘していただきたいのですが、個人的な意見としては、おそらく「八」というのは「谷」から通じる、そこから来たと思います。「鶴」というのは後から付けたものだと思います。「八」と「鶴」が通じるとどの本にも書いているのですけれど、どうして通じるのかということは説明されていません。

実は資料を調べてみますと、昔は八鶴湖に鶴が生息していて、よく捕れたようです。手元の資料によりますと、皆さんがご存じのように、御成街道は家康の鷹狩りのためにできた道路で、家康がよく来て、休息のために御殿ができたという話もあるのですが、『駿府記』に、慶長十九年（一六一四）の一月九日東金着という記録があります。十日初日には鶴五羽、雁十八羽が捕れたらしく、十一日に鶴六羽、雁十六羽、十二日に鶴三羽などが、捕れた記録があります。こういうふうに毎日鶴が捕れたというのは、当時鶴がたくさん生息していたのではないでしょうか。ここに八鶴の鶴が登場したと思うのです。『駿府記』によると、この辺は猪や鹿もよく出没していたらしいのです。同記録に「九日東金着、（中略）十三日佐倉の土井利勝等百人許り猪狩をなす。吉田より佐倉まで猪狩をなし、鹿二頭猪四頭、十四日雨、十五日狩、十六日卯刻東金を立ち申刻千葉着宿り」と書いてあります。十六日に千葉に帰って千葉で一泊し、十七日に狩りをしつつ葛西を通って十八日に江戸に戻りました。まあ大体一週間以上、こういう狩りの旅に出たということです。

そういうところから「八鶴」という名前が出てきて、また面積から見ると池ですが、漢詩の習慣に従って、湖という呼称を付けたと思います。面積は約一万一千坪です。

八鶴湖の歴史については、過去にいろいろな方が書きましたが、どうもこの八鶴湖の近くに人々が住み着いたのは、六世紀ごろらしいのです。発掘調査によると六世紀ごろの竪穴式住宅が現在の日吉神社の裏のところにあって、当時使っていた道具などが見つかったという記録があります。人家より神社とお寺が先に森の中に建設されて、そして文禄三年（一五九四）に最福寺と寺所属の田畑、それから市街地の防火用水のために、池が造られたと言われております。

これはどういうことかと言いますと、実は下総の中部から上総の台地にかけて、この地域は全体的に北西に傾斜しているようです。多くの川の水が傾斜に沿って流れるので、大体印旛沼か東京湾に流れてしまう傾向があるのです。そうしますと、この九十九里の平野の田畑を潤す水が少なく、この地方の人びとは昔から常に水不足に悩まされて、田畑を灌

漑するために、雨水の流れをせき止めて池を作り、もともとその辺はちょっとした盆地ですので、水が溜まりやすく、池を作って田畑の灌漑用の用水にしたと言われています。

その一つの証拠としては、雄蛇ヶ池が、水田の灌漑用水として、慶長九年（一六〇四）に起工されて十九年に完成、十年ぐらいかけて造られました。八鶴湖も本来、文禄三年（一五九四年）に、朱印田の灌漑と市街防火の用水のために造られたと言われますが、慶長九年に、もとの小池を拡張し、堤を築いて、弁天島を設け、慶長十九年に一大庭園に作り上げました。そのため、この池を御殿前池と呼ばれたときがあったのです。江戸後期には多くの水鳥がこの湖に泳ぎ、また周辺の山々の松や杉の影が湖面に写し出され、今見ても本当に素晴らしい景色です。

僕が東金にやってきて、本大学に奉職したのは五年前ですが、八鶴湖はいつも見飽きない風景で、とても好きです。毎年何度か必ず足を運び、景色を観賞します。ちなみに今朝もまた行って歩いてみたのですが、一周を普通の速度で歩いて十五分ぐらい、こぢんまりとしたきれいな場所です。本当に東金を代表する観光地にふさわしいところです。

さて、天保十二年（一八四一）に遠山雲如と梁川星巌が来遊して、漢詩を残しました。それ以降もたくさんの詩人が訪れ、漢詩を書いたため、ここ八鶴湖は小西湖という名の非常に風光明媚なところとして知られるようになり、明治初期には名勝地になったようです。

まず景色を見ますと、後ろに山があって森があります。小さな湖があって、中に人工島がある。今、弁天島は半島になっていますが、どうも最初は湖の真ん中に浮かぶ島だったらしいのです。あとこちらは狩りの場で、一般住民による殺生はご法度のため、水鳥がたくさん住むようになり、非常にきれいな景色になったということです。もともとは蓮の花が多く咲いていたそうですが、言い伝えによると明治五年ころ、当時の領主の板倉侯が国替えさせられると、八鶴湖の蓮はその後開花しなくなったと言われています。個人的にこの話は作り話ではないかと思っています。おそらく偶然何かのきっかけで花が咲かなくなったり、数が少なくなったりしたちょうどそのころ、領主の国替えがあったため、主君の治世を慕っていた人々が、明治政府の処置を憎んでこのような伝説を考えたのでしょう。

また記録を見ますと、明治四十三年に水が氾濫して堤防の上を流れ、浸水の被害に遭った家があったのです。この湖は自然現象により、私たちの生活に利便性をもたらし、市民の憩いの場となったと同時に、大雨が降って氾濫すると被害をもたらすものでもあったということです。昭和三十三年八月に八鶴湖児童公園として整備され、昭和六十年には八鶴湖公園の整備に着手して遊歩道を整備し、ほぼ現在の形になりました。

昭和四十四年頃、東金高校の先生が書いた文章を読みますと、柳の木がないと書かれています。今ある柳の木は、おそらく公園整備の際に新しく植えられたと考えられます。そして現在は桜の名所としても知られ、毎年四月上旬になると花見客で賑わいます。

昭和二年刊の『東金町鳥瞰図』という二枚ぐらいの大きな地図がありますが、八鶴湖だけ描いているところだけを切り取って今お見せします。下のほうに現在の旧道、いわゆる東金街道がはっきり描かれています。東金の駅もできたところで、電車も走っています。あとは商店がずらっと並んで、東金町は当時房総半島の中でも繁華街として知られていたのですね。店がずらっと並んで、一軒一軒の家の名前が書いてありま

『東金町鳥瞰図』（昭和二年刊）より八鶴湖の部分

す。この地図は県立中央図書館に置いてありますので、興味のある方は是非ご覧になってください。

ここが八鶴湖です。ほぼ現在の形と同じです。ここには最福寺があります。ちょっと字が小さくて申し訳ないのですが、最福寺の「さい」は現在は最高の「最」ですが、昭和二年ごろには、「西」と表記されています。最福寺の看板の説明によりますと、昭和二十五年か二十六年に今の表記に落ち着いたと書かれていますが、東金年表を見ますと、過去に二回も「西」に変えられたという記録がありました。それから後ろの神社の名前も現在と違います。事平神社と書いてあります。

この辺が当時の東金女子高等学校です。ここは本漸寺、ここは有名な八鶴館です。この辺りはほとんど全部森なのです。ここに布施商店というのがあって、このところに東金公会堂があります。現在東金の八鶴湖の入口から入ってくる道はここから来るのですが、昔はほとんど家がありません。今は家があるのですけれど、当時はここが学校で、こちらとこちらが田んぼで、後ろに神社が二つあって、この上に田んぼがある。三方面が全部緑に囲まれていて、前には家が少しと八鶴館だけがあって、数歩外に来ると街道があるというようなところです。

にぎやかな街道から一歩なかに入った静かなところで、見事な景色が広がります。このような感じです。これは鳥瞰というか斜め上からの景色ですが、次をご覧ください。これはどこにでもある地図で、これが現在の八鶴湖の形です。丸ではなくて三角形に近いような形に、公園を整備したときに小さくなったようです。明治期の写真を見ますと、湖の上にボートを浮かべているのですが、湖とボートの大きさの比率が、今と比べるとボートが小さく見えるので、湖はもっと大きかったと考えられ

ます。これはどこにもある地図ですので、あまりはっきりとは分からないですが、次の写真は見やすいと思います。これを見ると一目瞭然で、この辺の緑が削られて家が建てられています。この辺がお寺で墓地、ここが東金高校で、八鶴館は昔の写真では一番高い建物だったのですが、今はほとんど目立たなくなりました。住宅地の開発で、風景は昔に比べて随分変わりました。

八鶴湖は「小西湖」と言われています。中国の杭州にある「西湖」は、似ていると言えば似ているのですが、こんな形です。西湖は随分広く、手元の資料で見ますと、大きさは五・六平方キロメートルです。こちらをご覧いただきたいのですが、ここに人工の小さな島が一つあります。三潭印月の写真を後ほどお見せします。ここに蘇堤という長い堤防があって、人工の島があって、ここに白堤というもう一本の堤防があります。西湖は、湖の中にまた小さな湖がいくつかあるのです。全体的に見ると、この辺は緑があって、この裏には山があります。平地を下のほうに下ってくると、銭塘江という幅の広い大きな川があります。昔、秦の時代には、西湖と銭塘江がつながっていた時期があったようです。のちに一部を埋めて湖になったという話を聞いたことがあります。後ろに山があって、周りが緑に囲まれ、前面だけが外に向かい開放しているのが、八鶴湖と雰囲気が似ています。特に後ろの山が遠景として借景になります。それから湖の真ん中に、半島と言ってもいいのですが、堤防があって島がある。弁天島と似ていると言えば似ています。

次に漢詩のほうに入りたいと思います。最初に遠山雲如が出てきます。お手元の資料に生い立ちが書いてありますので、それをご覧になりながら、簡単に説明していきたいと思います。遠山雲如がどうして房総地と関係があるかと言いますと、彼は天保十一年（一八四〇）に上総に移居してきて、東金あたりに約十年間住んでいました。その後の十年間は上総各地を転々としていました。そのあと江戸に戻り、すぐまた相模の厚木に移って、さらに八王子、京都、淡路を転々として最後は京都で亡くなりました。なぜ各地を転々としていたかと言いますと、実は塾の先生をやっており、生計を立てるためにいろいろなところへ行って、子供たちに教えていたのです。その当時、漢詩人は当地の名主の家に寄宿して、その子弟を育てる、まさに中国の私塾と同じスタイルをとっていました。

中国では塾・私塾・あるいは家塾と書くのですが、金持ち・地主や日本で言うと庄屋さんが、子どもの教育のために先生を雇い、塾を開き、その先生の衣食住を全部面倒見るのです。

上総を転々としていた十年間に、一宮の藩主、加納久徴という人と交友をしていたようです。この人は幕末の一宮藩主だったのですけれど、当時は遠山雲如、梁川星巌や当時の文壇の一流詩人と交流したという記録があります。恐らくその縁もあって遠山雲如は房総にやってきて、八鶴湖を見て感動をしたということのようです。

まずこれは非常に有名な詩ですが、読んでみます。「波光煙影　晩に模糊／紅塵を抖擻して　一點無し。水に貼る青荷　岸に垂るる柳／東金郭外の　小西湖」と。下には「右遠山雲如山人、八鶴湖を遊するに作録代題詞」と記してあります。

最初の一句目は波の光、それから煙の影、この煙は何の煙かと言いますと、八鶴館の周辺には民家やお寺がありますので、恐らくご飯を炊く

ときの炊煙などではないかと思います。夜の「模糊」は、ぼんやりとして、まわりを囲んで緑があって、霧が立ちのぼりぼんやりとした、夕日が落ちて暮れかかっているときの景色です。まだ若干明るいのですけれど、だんだん夜に向かい暗くなっていく感じです。紅塵というのは、私たちが生きていく上での悩みや煩いなど、例えば俗世間の中の欲望、そういうものを紅塵と言います。

抖擻は、現在こういう漢字は使わないのですけども、要するに世の中のことをすべて忘れて、自分の身体にたまった埃をはたいてという動作で、深読みすると世の中のことを全部忘れ、純粋に景色に没頭して鑑賞するのです。

目の前の景色は、湖の水面すれすれに接近している青い蓮の葉があって、岸には柳の枝が垂れ、この景色はまさに中国庭園の景色ですね。池の中に蓮の花が咲いている。日本では柳の下に幽霊のイメージが強く、柳はあまり好かれていないようですが。

東金郭外。東金という地名は、漢詩の場合はたぶん「とうきん」と詠むのではないかと思います。東金郭外小西湖。東金城の跡ですが、酒井氏が当時治めていた東金城の城郭の外に小西湖がある。全体の景色が西湖にフォーカスしているのですが、これが最も有名な詩句になって、後代の詩人に引用されました。今日の講演の題にも使用した次第です。

次に梁川星巌が詠んだ詩ですが、この人は遠山雲如の先生です。この漢詩集の中には彼の門弟たちがたくさん出てきます。東金の八鶴湖に中央詩壇の詩人が多くやって来るきっかけをつくった人物だと思います。この人は江戸詩壇に主導的な立場を占めていた人物で、藤田東湖や佐久間象山ら、当時の一流の詩人と交流があったと言われています。先ほど述べましたように、天保十二年（一八四一年）に八鶴湖の辺りを散歩しました。類推すると、遠山雲如が天保十一年（一八四〇年）にすでに房総半島にきていたので、そのきっかけで自分の先生をここに招待したと推理できます。

最初は「勝遊此の如き　應に無かんべし／来たりて倒す　沙頭の雙玉壺／五月の薫風　鰕菜を長じ／一生の衾袍　菰蒲に在り　山明水媚　看て逾好し／扇影衣香　興孤ならず／方に悟る　雲如が詩句の妙　東金郭外の小西湖」と読めます。初めの詩句をご覧いただきたいのですが、このようなきれいな景勝地は恐らくもうないだろうと最初に言っています。「勝遊」というのは、非常に素晴らしい景勝地の意です。楽しく遊べるところ、楽しく観賞できるところは恐らくこれ以外にないだろう。次のところは「来たりて倒す　沙頭の雙玉壺」。詩人は詩を詠む前に、まずお酒を飲みます。おそらく八鶴館ではなくて、この辺りのどこかで酒を飲みながら見ていたのです。五月の景色、旧暦の五月ですので、今で言いますと六月か七月の初めころです。風が花の香りを運んできて、酒を飲みながら食べている料理がさらにおいしくなる。一生この辺りで生活してもいいと。最後に「菰蒲」という言葉があります。後ほど出てきますけれど、これは宋詩の中に西湖を詠むときに使われた詩句ですので、梁川星巌も当然知っているはずです。「山明水媚」は山紫水明と同意で、風景の美しい場所。季節は夏なので団扇を使いますね。孤人のことも詠んでいますけれど、景色がよいのでますます楽しくなる。締めくくりとして、初めて雲如の詩句が非常に素晴らしいということを悟ったと。つまり雲如の詩のほうが先だということが分かるのです。最後に雲如の詩を踏まえて、「東金郭外小西湖」と。「壺」、次は「蒲」、そして

「孤」、最後は「湖」。中国語で読むと全部韻を踏んでいます。

次はもう一人有名な詩人、森春濤の詩です。韻に全く同じ字を使っています。これは「次韻」という詩人同士の典型的な付き合い方で、相手が作った詩と同じ韻・同じ字を使って、同題ですけれど別の詩を作るという作法です。ただ森春濤も梁川星巌の弟子で、明治初期の詩壇に君臨した人物で、特に彼は明治政府の高官たちの詩を自分の雑誌に載せていますので、政治的な力を随分発揮している人です。

「落日青山影欲無。人間亦有小方壺。水宜清浅疎疎雨。
風弄軽歩猟猟蒲。虚壁雲歸僧骨峭。古壇松仄鶴身孤。
要知華表千年意。須問東金郭外湖。」

この詩を見ますと、最初は夕方の風景を、要するに景色はだんだん暗くなっていくけれども、私たちは続けて飲みましょうと。小雨が降ってきて、そういうときは八鶴湖の景色が一番きれいです。小雨が降り、まわりの霧やら煙やらがどんどん昇っていき、空と湖がつながって、周りの森と一体化してものすごくきれいな風景です。次はお寺です。非常にやせたお坊さんが帰ってくる。雲もたなびいている。古い壇はお寺の歴史を語っているのですが、この辺に鶴が一羽だけいるのが非常に寂しいと。全体的に非常に侘びしい、寂しい景色です。

最後に「華表」とは鳥居のことです。神社の鳥居を漢語で説明すると華表と言います。要するにこのお寺や神社がどれだけ古いかを知りたければ湖に聞きなさい、湖が証人なのだ。誰もこの辺りの歴史を知らないだろう。湖だけがこのお寺あるいは神社と一緒にお互いに見守って、助け合って、あるいは寄り添い合いながら生きてきたということです。さすが明治初期の詩壇を支配していた森春濤の力を感じる、素晴らしい漢詩だと思います。

残りの漢詩人たちはもう説明しませんので、資料の後ろのほうに載っています。どうぞお時間のあるときに鑑賞していただきたいと思います。森春濤は梁川星巌の弟子で、大沼枕山は森春濤と同じところで勉強していた。そういうつながりがあります。大槻盤渓も明治期の有名な漢詩人で、漢詩文界の老将と目されています。小野湖山も梁川星巌の弟子です。ちなみに余談ですけれど、森春濤の息子さんが森槐南ですが、この人は明治後期の漢詩壇を支配していた有名な人物で、政治政界ともつながりが非常に強い。時の総理大臣、伊藤博文とも親交が深く、伊藤博文がハルピンにて暗殺されたとき、森槐南がすぐそばにいたので巻き添えになって怪我をしたという話があります。

川田甕江は重野成斎と三島中洲とともに明治の三大文章家と賞賛された人物です。三島中洲は現在東京にある二松学舎の創立者です。僕が研究している夏目漱石は明治十四年に二松学舎に入って、一年か一年半ぐらい漢詩を勉強していた時期があったのですが、当時の先生が三島中洲です。そして重野成斎。この人もやはり先ほど出ていましたけれど、文学博士です。最後の二人についてちょっと触れたいのですけれど、安川柳渓は福俵出身、地元の方です。少年時代から学問や武芸に励み、十九歳のときには飯田家に滞留していた江戸の画家、高久靄崖に絵を学びました。彼は遠山雲如や大沼枕山とも親交が深く、そのつながりから梁川星巌の指導を受けました。明治四年に福俵村の戸長に任命されたのですが、まもなく辞職して画業に専念するようになり、明治七年五十五歳のときに千葉県から修史委員に任命されて、三年がかりで上総国誌全六巻を完成させています。

昨年、本学の美術館で房総上総ゆかりの絵と書を展示したのですが、そのとき八鶴館の序という漢文がありまして、その執筆者がこの安川柳渓だったと記憶しています。その序文は見事な漢文でした。それから村井松潭は、漢詩集を編集して、今日取り上げました『鶴湖唱和集』には載っていないのですが、志賀吾郷さんの本の中に載っています。この人は生卒年がよく分からないのですけれど、どうも親戚の方が現在俳句をやっていて、同じ「松潭」という俳号を使っているらしいのですが、直接お目にかかったことはありません。地図を見ますと村井医院が昔からあるので、ひょっとしたらその関係者かもしれませんが、詳しくは分かりません。このように、地元の人も八鶴湖を題にして漢詩をよく詠んでいたようです。

次に風景の変遷を簡単に述べます。蓮と水鳥と湖畔の柳は、江戸後期、幕末あたりの景色で、明治初期もそうでした。それから釣りをするために釣り船を使うようになりますが、それは八鶴館ができた後のことだと言われています。さらに時代が下ると、柳の木が伐採されて桜が植えられ、江戸後期の中国庭園風の景色はだんだん変化し、日本独自の景色が現れてきたと考えられます。

当時の写真をちょっと見ていただきたいのですが、これは弁天島の入口から見た八鶴館です。八鶴館の後ろには何もない。ここは弁天島の小さな東亭で、これは弁天島の方向から見た、恐らく最福寺ではないかと思います。この辺は非常に緑が多くて、この写真の八鶴湖は水がありません。人が立っていて、水を全部出して掃除しています。これは明治四十一年の夏の写真です。その年の三月に台風が房総半島沖を通過して、六月に雹が降り、八月に台風がまた通過したので、水があふれた可能性があります。それで水門を開き、いったん水を全部出して池を掃除したのです。なぜ人が湖の中に立っているかと申しますと、おそらくエビや魚を捕っていたのでしょう。

次にこれは昭和初期の写真です。後ろが八鶴館で、ボートが浮かんでいます。昭和二年刊の本に載っていたものですので、大正ごろに撮られた写真ではないかと思います。冬の景色です。さきほど申し上げましたように、湖の真ん中に小さく点々と船が浮かんでおり、現在のボートと比べると随分小さく見えるので、当時の湖はもっと広かったように思われます。

東金の景色は、「東金八景」と言われます。「両寺の晩鐘、湖畔の楼、大宮台の青巒、小西湖の釣魚、弁天島の秋の月、鴇嶺の夕照、山王台の帰鴉、城址の暮雪」。つまり、二つの寺の晩鐘、湖畔の楼八鶴館、山の景色と小西湖での釣り、弁天島の中秋の名月を眺め、そして東金の地名の由来と言われている鴇嶺の夕照があって、山王台にカラスの鳴き声がして寂しく聞こえる。その侘しさ、寂しさがまさに漢詩の世界、あるいは和歌の世界と言ってもいいでしょう。それから城址の雪。こういった四季折々の景色が全部楽しめるのですね。東金八景が中国杭州の西湖の十景と関連が深いのではないかと思います。「平湖秋月、断橋残雪、曲院風荷、蘇堤春暁、三潭印月、柳浪聞鶯、雷峰夕照、花港観魚、南屏晩鐘、雙峰插雲」。中秋の名月、蓮があって、周りには山や森、東亭があります。また春は中国では桃の花、冬には梅の花を観賞します。それからこれは三潭印月で、先ほど述べた真ん中の人工島が一つの有名な景色です。真ん中に小さな道があって橋を渡って、周りは柳の木です。これはお寺の夕方の景色で、錦鯉が泳いでいて、鐘があり、後ろのほうに遠

景の借景で山、近景に人工島があるのが東洋美というか中国の庭園の特徴です。レジュメに西湖を詠んだ宋詩を一つ例に出しました。この中に菰蒲という詩句があります。どうぞご鑑賞いただきたいと思います。

最後簡単にまとめさせていただきますと、江戸初期から上総全体の景色は、牧歌的原風景で、八鶴湖だけが恐らく房総半島で唯一トータルデザインによって造り上げられた景勝地ではないかと思うのです。遠景に山の借景はあり、近景に亭の造形はあり、典型的な東洋的風景を現しており、造園時には南画的風景を意識的に導入しています。先ほどの宋詩は、董亭道の絵に書き添えられた詩で、当時中国では西湖を画題にした南画がたくさん書かれ、その中のいくつかが日本にもたらされて、日本の漢詩人もそれを見ていたに違いありません。

八鶴湖は、西湖と同じく、湖面に船を浮かべて山を眺め、また山に登って湖を一望する。双方向から景色を鑑賞でき、湖面は山と緑を映し、山は水の音と光で一層輝く。それが八鶴湖の魅力ではないかと思います。遠山雲如の「東金郭外小西湖」の詩句は、画竜点睛のように、八鶴湖の魅力を見事に一文で表しています。名詩人の詩句と素晴らしい景色の相乗効果によって、八鶴湖は東金を代表する景勝地になりました。八鶴湖が漢詩に詠われるのみならず、伊藤左千夫の小説「春の潮」にも登場しています。小説の中では、主人公の千代が八鶴館に一泊する場面があります。最福寺は済福寺と標記されていますが。このように、八鶴湖は決して一地方の景勝地だけでなく、中央の詩壇から注目されるところであり、幾世代にわたって文学と深い関わりがあるところでもあります。

時間が残り少ないので、最後に一つだけ補足します。江戸時代の漢詩人たちは、どのような旅程で千葉の東金にやって来たのでしょうか。当時、銚子ルートと船橋ルートがあります。明治初期に東金の人たちが東京に行って物を仕入れるのに一日半かかりました。当時、道中は物騒だったので、徒歩で船橋に行き、船橋で一泊しそこから船で霊岸島に行くというルートです。梁川星巌は、銚子ルートで東金に来たのですが、船で銚子に来て、遠山雲如が銚子まで出迎えに行ったそうです。のちに明治二十年代ごろに汽船ができ、鋸南町ルートが開通されました。夏目漱石は霊岸島から汽船に乗って、鋸南にやって来き、房州半島を一周する旅をしたのです。明治十五、六年あたりに馬車ができて、一日一便、朝出て夕方に両国に着くという記録があります。先日知った事実ですが、昭和三十八年頃には東金から電車で東京まで三時間以上かかったそうです。ですから今私たちが一、二時間ぐらいで東京に行けるのは、幸せな時代だなあとしみじみ感じます。今日はご清聴ありがとうございました。

【司会】　欒先生、どうもありがとうございました。お話をいろいろと伺いながら、今の八鶴湖と昔の八鶴湖をいろいろ思い浮かべて聞いていたのですが、昔に戻ることができないので、例えば今の時代の例えば西湖辺りに機会があれば是非行ってみたいという気になりました。あと五分ぐらいでしたら時間がございますので、もしご質問がありましたら、どうぞご遠慮なくおっしゃってください。お願い致します。

【質問者】　一宮の山に入ったことがあります。一宮の藩主がつくった人工湖がありまして、それに洞庭湖という命名がしてあるようですが、これはやはり雲如の影響があるのでしょうかね。どう思われますか。

【欒】 申し訳ないのですが、それについては、あまり詳しくありませんので、いま即答できませんが、今後の課題として調べさせていただきます。

【質問者】 慶長十九年に、何ておっしゃったか、一月九日に東金について何が何羽とかいうのは、あれは何ですか。

【欒】 『駿府記』です。これは家康が狩りをしていたときの記録でございます。

【質問者】 東金の町の鳥瞰図というのは、あれは何年ころとおっしゃいました。

【欒】 昭和二年です。ちなみにこの鳥瞰図の作者は松井天山です。

【質問者】 その実物はどこでも見られる物ですか。この図書館にもあるとおっしゃったのですか。

【欒】 僕がこの実物を見たのは、県立中央図書館です。ご近所の図書館に問い合わせていただければ、たぶん取り寄せてくれると思います。

【質問者】 三島中洲とかいう人が三大何とおっしゃったのですか。

【欒】 三大詩文家。漢詩と文章。三大詩文家です。

【質問者】 三島中洲とあと誰ですか。

【欒】 重野成斎と川田甕江です。

【質問者】 ありがとうございました。

（らん　でんぶ・本学人文学部国際交流学科助教授）